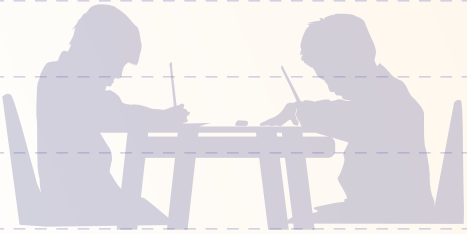
特集 「統一合判」中学入試レポート vol. 4

2015年入試の変化のもとで、

チャンスを生かす受験校の選び方

9月以降、夏休みを終えて、6年生が本格的な入試対策に取り組み始めてから、すでにひと月半。来年2月の入試本番まで残り3か月半となった。保護者の皆さんも、いよいよ併願校を含めて、受験校を決めていく時期。年ごとに多くなる入試要項変更によって、“激動”が恒常化してきた中学入試だが、来春2015年入試はどうなるのか。目立った動きを確かめてみるとともに、そこで生まれるチャンスを生かす、受験校の選び方を探ってみよう。



首都圏模試センター

グローバル人材を育てる21世紀の教育は、私立中高一貫校がリードする！

毎年、非常に多くの入試改革が行われることで激しく状況が変わってきた首都圏中学入試。例年、前年入試の直後から翌年に向けての入試変更が次々と公表され、それぞれの学校の志望者数や難易度の変化、全体的な人気動向の変化などが、その翌年入試に向けての話題となっていく。

来春2015年の首都圏中学入試は、2月1日が日曜日にあたる、"サンデーショック"の年。日曜日には入試を行わない方針のプロテスタント校の多くが、この年だけは2月1日の入試を避けて、翌2日に入試日を移行する。これによって、女子学院、フェリス女学院、立教女学院、東洋英和女学院A、横浜共立学園Aなどの人気校の入試日が移動するため、とくに女子の入試の全体図が大きく変わる。一方でこの“サンデーショック”の動きに対して鎌倉女学院①、湘南白百合学園など、従来は2月2日に実施してきた入試日程を、逆に2月1日に変更するケースも出てくる。

また、先のプロタスタント校の2月2日入試への移行に同調して、（従来の併願パターンを崩さないよう）カトリック校ながら2月1日から2月2日入試に移行する横浜雙葉、清泉女学院①などの動きの影響も少なくない。

同時に、これらの動きに合わせて、近隣エリアや周辺の人気競合校にも入試日を変更する動きが出てくることになる。これらの変化によって、人気が増加して難化の予想されるケースと、逆に合格のチャンスが広がることが予想されるケースが出てくる。受験生にとって、来春2015年の首都圏中学入試では、これらの大きな変化のなかに、“合格のチャンス”を見出すことができるということだ。

そして、もう少し視野を広げて見れば、ちょうどいま日本の教育そのものが、この先さらに加速する国際化、グローバル化、ボーダーレス化社会の到来に備えて、新たな施策を打ち出し、大きく変化していこうとしていることも、来春2015年の中学入試の人気動向に影響を及ぼしている。

文部科学省が昨年6月に打ち出した「大学入試センター試験の廃止」と、それに代わる「達成度テスト」（仮称）の実施は、当初予定された2018年から少し先送りされそうではあるが、遅くとも2021年から実施されることが、いよいよ現実化してきた。これは大学志願者の学ぶ意欲を引き出すことで、高等教育の質を高め、国際社会で活躍するグローバル人材の育成につなげるという狙いによるものだ。この大学入試改革が実現すると、1979（昭和54）年に始まった共通１次試験以降、１回の共通テストが合否を左右していた大学入試が抜本的に変わることになる。

さらに、政府による「教育再生実行会議」の第3次提言によって昨年打ち出された、グローバル・リーダーを育成する先進的な高校を「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」として指定し、それらの学校の教育課題と研究を支援する施策は、すでに今春3月から動き始めている。

また、初等・中等教育段階から世界に目を向け

“サンデーショック”の来春2015年入試では、2月1日から2月2日に入試日を移行し、女子の人気動向に影響を及ぼす女子学院。

グローバル人材の育成に向けて、「21世紀型スキル」を育てる世界標準の教育への改革を着々と進める海城。期待がかかる。

させるため、小学校での英語教育の拡充や、国際バカロレア認定校の大幅増加を図り、スイス・ジュネーブに本部を置く国際バカロレア機構と文科省間の取り決めにより、「IBプログラム」の最大3分の2のカリキュラムを日本語の授業で行うことも可能になった。これによって、政府は「IB（国際バカロレア）」資格を授与できる認定校を、現在の16校から200校まで増やす方針を打ち出している。

これらの改革から、国の教育政策もグローバル化に向けて大きく舵を切っていることが明らかで、教育再生実行会議による第三次提言からも、政策の軸足がはっきりと「グローバル・リーダー育成」に置かれていることがわかる。幅広いコミュニケーション力をもち、世界を舞台に活躍できるエリートを育てることが急務とされているのである。

こういったSGHの設置や、国際バカロレア認定校の増加により、海外大学への進学を希望する高校生がますます増えていくことも間違いない。そして、そうしたグローバル人材を育成する教育を実質的にリードしていくのは、現実的には間違いなく私立中高一貫校だと考えていい。

ただし、こうした教育の国家的な転機を迎えたときほど、私学の教育内容に対する保護者の視点は、より厳しく、かつ真剣なものになる。私学を選ぶ基準や期待値も、それに応じて高くなる。公立学校でもSGHに指定された高校などに期待が寄せられ、9月初旬に公表された、来春2015年開校の札幌市初の公立中高一貫校、札幌開成中等教育学校で「IBプログラム」が導入されるという動きにも、関心を寄せる保護者が増えることだろう。

そして、同時に多くの私学が、この機に、さらに自校の教育内容を進化させるために改革を進め、その方向性を発信する広報活動にも力を入れることによって、私学への期待や注目も高まってくる。それによって、また翌年の人気動向や入試状況も少なからず変化していく。

今回は、秋までに明らかになった入試変更をもとに、来春2015年の入試状況をできる範囲で予想し、その変化のなかでチャンスを生かす受験校の選び方をお伝えしていきたい。

「模試を受ける」ことで、最新の動きを知りわが子の合格のために役立てる！

21ページのコラムには、来年に向けての入試要項変更や学校改革の事例をもとにした、2015年入試の目立った動きをご紹介した。

こうした私学の動きや、人気動向の変化から、翌年入試には全体的にどのような傾向が予測されるのかを、保護者はできる限り知っておく必要がある。こうした数々の変化のなかには、必ず新しいチャンスや合格への突破口が生まれてくるからだ。そして、それを探り出すためには、正確で幅広い、最新の入試情報が必要になってくる。

こうした最近の中学入試のリアルな実情を把握し、それをクリアできる力を身につけるためにも、保護者の皆さんには、お子さんが「統一合判」のような大規模なテストを受験する機会に、最新の中学入試情報をキャッチして、それをお子さんの“合格”に役立てていただきたいのである。

とくに次回11月と、最終回12月の「統一合判」では、それまで蓄積してきた各校の志望動向から、いよいよ最終予想が固められていく時期。この2回の模試を受けると同時に、そこでそうした最新の情報をキャッチしていくことは、万全の合格作戦を立てていくためにも、最重要の課題といってもいいだろう。

入試地図はまた変化する！ 2015年の首都圏中学入試

次に、21ページのコラムで触れたことも含めて、目立った入試変更や学校改革の動きから、来年入試で生まれてくるチャンスを実際に探っていきたい。

まず、冒頭にあげたのが、来春2015年には、2月1日が日曜日となる“サンデーショック”の動きだ。日曜日には一部のプロテスタント校は入試を行わない慣例があり、女子学院やフェリス女学院をはじめとした人気校が2月2日に入試日を移行する。これによって、まず人気が競合する各校の志望動向に影響が出ることになる。

こうした一連の動きにともない、過去の通例ならば、（1）2月1日から2日に入試日を移行した学校（女子学院、フェリス女学院など）、（2）従来通り2月1日入試にとどまる学校（桜蔭、雙葉など）、（3）従来から2月2日に入試を行い来春も2月2日入試にとどまるため2月2日参入校の影響を受ける学校（白百合学園、豊島岡女子学園①など）、（4）従来は2月2日入試を行ってきたが来春のみ一時的に2月1日入試に移行する学校（鎌倉女学院①、湘南白百合学園など）、などのパターンによって、それぞれの人気動向をある程度は予測することができた。

しかし、来春2015年入試については、2月1日や2日の午後入試実施校（2/1の恵泉女学園S、東京女学館一般②、2/2の桐蔭学園②PMなど）の増加など、“サンデーショック”以外の様々な動きによって、こうしたパターンに当てはめての予測が難しくなっている。

次にあげたのが、来春からの共学化と同時に校名変更し、「21世紀型スキル」を身につける「世界標準の」教育プログラムの導入を公表した三田国際学園、開智日本橋学園をはじめ、工学院大学附属、かえつ有明、聖学院、文化学園大学杉並など、いわゆる「21世紀型教育」の実践を標榜する私立中高一貫校の人気の高まりだ。

来春2015年入試に向けて共学化する東洋大学京北はすでに「統一合判模試」で全回の入試とも前年比400～500％の志望者を集める大人気。この共学化による注目に加え、さらに「21世紀型教育」への期待がプラスされた前述の三田国際学園、開智日本橋学園がどこまで人気を高めるか楽しみになってきた。

そして、これら「21世紀型教育」の導入を明確に公表した私学以外にも、「IB（国際バカロレア）プログラム」など「世界標準の」教育の理念をしっかりと見つめ直し、そのうえで、各私学の独自のプログラムや新たな展開によって、そうした「21世紀型スキル」を育てる教育を実現しようとしている私学も少なくない。

先の“サンデーショック”の影響もあって、志望者の増加が目立つ立教女学院の人気も、一方で

この2014年7月には特別教室棟が竣工し、全生徒が新校舎で学べる形になった成城。来年1月にはテニスコート・グラウンド（人工芝）・部室棟など諸施設が整備され、創立130周年の記念事業としてのキャンパスリニューアルがすべて完成する。

は、同校独自の「ARE学習」など、先のIBの理念に共通する「21世紀に求められる力」を育てるプログラムの実践とその成果が注目されていることも理由のひとつだろう。

グローバル教育の実現への改革を着々と進める海城や、今回の「私学の魂」でご紹介した山脇学園なども、すでに独自の「21世紀型教育」の導入～実践を進めている私学と見ることができる。

こうして多くの私学が、日本の教育の大きな変化の節目に、自らの教育をさらに進化・発展させようとしている動きにあらためて注目し、今後の人気動向を見守っていくべきだろう。

また、東京都市大学付属、東京都市大学等々力、桐蔭学園などは、来春2015年入試から、（帰国生の別枠入試だけではなく）一般生の入試でも「英語選択」が可能な入試を新設する。この東京都市大学付属の2月2日「グローバル入試」の新設、東京都市大学等々力の2月2日午後の第3回入試での「英語選択」の導入、桐蔭学園の2月2日新設午後入試での「英語選択」の導入など、中学入試に「英語を導入」する動きは、現在の小学校5年生が挑む再来年2016年入試や、それ以降の中学入試に向けても、他に与える影響は少なくないだろう。

すでに海城、かえつ有明をはじめとした多くの私学でも、これまで以上に積極的に帰国生の受け入れが進められている現在だけに、こうしたグローバル化に力を入れている私学の「英語入試の導入」が意味するメッセージを、受験生と保護者もしっかりと受け止めておくべきだろう。

また、来春2015年入試に向けては、さらに午後入試を新設もしくは回数を増やすなど、試験回数（＝受験できる機会）を増加させる私学が多く出てきている。

これらの動きも、変化の激しい中学入試状況のもとで、各校が自らの入試レベルを下げまいとする工夫であるのと同時に、将来に向けて学ぶ意欲や良い資質を持つ受験生に、できるだけ多くの受験機会を提供したいという各私学からのメッセージでもある。

それならば、受験生と保護者は、そういう新たな受験機会を十分に生かして挑戦していくことが大切になる。そうした姿勢や幅広い視点を持つことが、結局は第1志望校の合格を後押しする結果にもつながってくる。

午後入試の増加についても同様に考えたい。すでに首都圏の中学入試では、非常に多くの午後入試が実施されているが、もともと午後入試とは、その日の午前中にそれ以上の入試レベルの学校にチャレンジして、その後に受けた午後の入試で（入試当日の発表で）合格を得ることができれば、翌日以降の入試でも、思い切って高いレベルにチャレンジしていけることから、受験生と保護者に広く浸透してきた経緯がある。

それだけに、すでに多くの午後入試が行われてきているが、自分（わが子）が午前中に受験する学校から移動しやすい場所や条件（集合時刻など）で、校風やタイプも好ましい私学が新たに午後入試を実施してくれれば、受験生と保護者にとっては、なおさら歓迎される。そうした意味で、来年新設される午後入試の人気動向や難易度予測には、やはり注目しておくべきだろう。

さらに複数回行っている入試日程の前倒しや短縮化など、各回の募集定員（受け入れ枠）の数を

今春2014年入試でも大きな人気を集めた東京都市大学付属。さらに来春入試でも、2月2日「グローバル入試」の新設などで注目される。

激動の2015年入試で“合格”を得るために、模試を上手に利用しよう！

～「継続して受ける」ことで学力を育て、自信をつけることができる！～

首都圏模試センターの「小6統一合判」テストも、この10月13日で第4回を迎えた。6年生では12月までに残り2回、計6回の模試が行われるが、この機会を十分に活用して、来春2015年入試での“合格”のステップにしてほしいと思う。こうした模試の上手な利用法は、何より「継続して受ける」ことだ。それによって、

①毎回の成績の推移と、受験生のなかでの自分の位置を知り、受験勉強の成果（手ごたえ）を確かめることができる。

②志望校の最新の入試情報と人気動向を知り、ベストの受験（併願）作戦を組み立てていくことができる。

③毎回のテストで力試しができると同時に、中学入試の“合格”に直結する実戦的な学力を育てることができる。

といった、いくつものメリットが得られる。そのためにも、毎回のテストでは、成績表や結果判定などのアウトプット資料をよく確かめ、試験問題や答案には何度も目を通して、しっかりと「おさらい」をしておく必要がある。

また、最近の小学生の皆さんは、まだまだこういった長時間のテストを緊張感のある状態で受けることに慣れていない。これまでにもお通いの塾での内部テストは何度も受けてきたと思うが、会場が変わって、周囲に初めて顔をあわせる子どもたちがいるなかでの（＝入試本番のような）テストには、また違った緊張感がある。こうした雰囲気にできるだけ早く慣れて、入試の本番でも感じるような、この緊張感も味方につけて、十分に力を発揮できるようになっておきたい。

継続して模試を受験することで、志望校に向けた課題を発見し、入試本番に向かう励みにしてほしい（写真は9月「統一合判」会場のひとつ文化学園大学杉並中の学校説明会）。

保護者の皆さんは、毎回の成績や志望校判定に一喜一憂するのではなく、客観的に結果を受け止め、それをプラスに生かすための工夫をしてほしい。どのような結果（成績）であったとしても、その都度お子さんを励まし、学力的に成長するための材料にすることを心がけていただきたいのだ。

また、テスト会場での説明会など、最新の入試情報が聴ける機会には、必ず参加して説明を聴いておくべきだろう。

こうして親子で上手に模試を利用することができれば、継続して受けることがやがてお子さんの自信にもつながり、来る2015年入試での“合格”への、力強いステップになるに違いない。

変更（調整）するケースも相次いでいる。とくに来春2015年の“サンデーショック”の動きの対応として、2月1日の入試初日にウエイト（募集定員の比重）を傾けるケースが増えている点にも注意しておきたい。

入試における試験時間や、配点を変更するケースもいくつか見られる。これは入試問題のタイプや質を変化させる狙いも含めて、受験生にとっては見逃せない変更だ。

少しでも関心のある私学の試験時間や、試験形態の変更は、要チェックのポイントだ。

そうした入試内容の変化から、その学校が「入試でどのような力を求めているか？」というメッセージを的確に掴み、合格への突破口を探っていく（＝そうした面から、わが子が合格に近づくことのできる出題の傾向やタイプを探る）ことも、来春入試を突破するためのひとつのポイントといえるだろう。

模試を受けることで、第一志望への課題と、ベストの併願作戦を組み立てるヒントを探ろう！

～「継続して受ける」ことで、合格へのチャンスが見えてくる！～

翌年の中学入試に挑む6年生が、模試を受けることで得られるメリットは、前のページのコラムで述べた通りだ。さらにこれを、親の立場で生かすべきことにしぼって、以下にポイントをまとめてみよう。

●第1志望校との距離を測り、課題を見つける

毎回の合格判定の結果や成績をもとに、お子さんの第1志望校の合格の目安（＝入試予想難度）と、現時点での成績とを考え合わせて、その学校への合格可能性や、そこまでの距離を測り、残された時間で何を重要課題として、親子それぞれが何をすべきかを検討する。

同時に、11月以降の模試の結果が出る頃には「受験する学校を確定する」気持ちで、併願校選びのための情報収集や検討を進めておく。

●豊富な経験を生かしたアドバイスを聞く

毎回の模試の会場では、入試に向かうためのアドバイスが聞ける、保護者向けの説明会（講演）が行われていることが多い。そこでは、中学入試に関する豊富な知識や関わった経験･事例をもつ講演者から、入試本番に向けての準備や、入試の最中にも役に立つ話を聞くことができる。

また、単なる情報だけではなく、わが子のサポート役を務めるなかで、迷いや悩みをもつ保護者を励まし、力づけてくれるような話も聞ける。そうした機会には、積極的に足を運んで、勇気や元気をもらうといいだろう。

●志望動向の変化による予想･分析を生かす

毎回の合格判定では、その月の志望動向（志望者数や成績分布）などをもとに、入試予想が立てられ、それが翌月の合格判定に生かされる。

そうした志望者数の数字やデータは、個々の成績表（アウトプット）にも反映される。それぞれの志望校の動向は、個々の成績表を見ることでわかるが、もうひとつ、全体状況のなかで、それぞれの動向がどうなっていくかという予測・分析については、やはり専門家の意見を聞いたり、配布された詳細な資料を見ることが必要になる。

それまでは気がつかなかった視点や、見落としていた情報を提供してくれることも多いはず。

「統一合判」模試の父母会（入試に関する説明会）では、最新の入試情報に加えて、変化する教育事情についての説明を聞くこともできる。

この時期までに、おそらくほとんどの家庭では、わが子の第1志望校、第2志望校については、詳細な情報を集めて、その学校についての理解を深めていることだろう。しかし、第3志望以下の併願校については、まだ十分な情報収集ができているとはいえないのではないだろうか。

そうした併願校選びに際しては、これまで持っていた知識や視点での見方だけではなく、新たな知識や視点に気づかせてくれる専門家の意見が役に立つことが多い。たとえば、それまではわが子に午後入試を受験させることを考えていなかった保護者が、模試でのアドバイスを聞いたことで、そのメリットや意味を知り、入試後になってみると「午後に受けておいてよかった…」と思えることも多いのだ。

●併願校を選ぶ多様な視点と最新情報を生かす

上に述べたことは、入試状況を知るためだけではなく、それぞれの学校を、もっとよく知るためにも大切だ。

とくに併願校を選んでいく際には、ややもすると、古い情報や評判にとらわれて、選択の幅が狭くなりがちなことも事実。数年前までは、まだ成果の出ていなかった私学が、最近になって目覚しい成果や実績を上げ、あるいは急速な変化・発展を遂げて、今後が大いに期待できる学校になっているケースは非常に多い。

最新の学校情報によって、そうしたことに気づかせてくれるのも、模試を受けることで得られる大きなメリットということができるだろう。その意味では、会場での保護者向けの説明会（講演）や配布資料に、しっかりと耳を傾け、目を通していただくことが望ましいと強調しておきたい。

前回の『ブレイク』9月号「中学入試レポート」の記事中P20の表中に一部誤りがありました。2月3日PM入試の欄に「桐朋女子B」の記載がありますが、正しくは2月2日午後の入試となります。お詫びして訂正させていただきます。

また変化が起こる、2015年首都圏中学入試の状況を的確につかむ！

７月の「統一合判」の際の「中学入試レポート」でも一度ご紹介しているが、ここで再度、来年2015年入試に向けての入試要項変更や学校改革の事例をもとに、目立った動きをご紹介しておこう。

●来春２月１日は“サンデーショック”

来春2015年の首都圏中学入試は、２月１日が日曜日にあたる、"サンデーショック"の年。日曜日には入試を行わない方針のプロテスタント校の多くが、この年だけは２月１日の入試を避けて、翌２月２日に入試日を移行する。

同時に、これらの動きに合わせて、周辺の人気競合校にも入試日を変更する動きが出てくることになる。これらの変化にともない、人気が増加して難化するケースと、逆に合格のチャンスが広がるケースが出てくることに注意しておこう。

●東洋大学京北、三田国際学園、開智日本橋学園が共学校に！「21世紀型教育」を標榜する私学も人気増加へ。

東洋大学京北（現・京北。男子校）は、白山の校地に新キャンパスが完成するタイミングに合わせて来春に校地移転し、男子校から共学校化。国公立大学への進学をめざす進学校として、同時に都内唯一の東洋大学の附属校として、いわゆる「半付属・半進学校」のメリットを存分に生かした教育体制で、新たな歴史をスタートさせる。

三田国際学園（現・戸板。女子校）は来春から共学化して校名も変更。リベラルアーツ教育を実践して思考型の学びを追及する本科と、一条校でありながらインターナショナルクラスを併設して、アクティブラーニングをすべての授業で取り入れて、独自のグローバル教育を実現することを謳っている。インターナショナルクラスでは、ネイティブスピーカーによるイマージョン教育を行う。

同じく開智日本橋学園（現・日本橋女学館。女子校）も、来春から共学化して校名を変更。グローバルリーディングクラス（インターナショナルコース）と、リーディングクラス、アドバンスドクラスを併設し、21世紀型学力（探究力・創造力・発信力）を育成するためにアクティブ・ラーニングを推進、イマージョン教育も導入し、グローバルリーディングクラスでは、国際バカロレアのMYP（中等教育プログラム）とDP（大学進学に向けたディプロマプログラム）を導入する。

また、三田国際学園、開智日本橋学園の共学化２校に加え、日本初のハイブリッド・インタークラスの開設をはじめ、ダイナミックな改革を公表した工学院大学附属中、「21世紀型教育」の実践を標榜する聖学院、かえつ有明、文化学園大学杉並などの私学も目立って人気増加。

いずれもすでに７～９月の「統一合判」模試での志望者も急増傾向にある。今後の人気動向に注目するとともに、将来性に大いに期待したい。

●東京都市大付属、東京都市大学等々力、桐蔭学園などが一般入試に英語を導入！

東京都市大学付属は２月２日に「グローバル入試」を新設。英語・算数・作文での入試を行う。東京都市大学等々力は２月２日午後の第３回入試で「英語選択」を導入、国・算・社・理の４科目か国・算・英の３科目を選択する。桐蔭学園は２月２日に午後入試を新設。男子部・女子部〈普通コース〉では国・算・英から２科目を選択、中等教育学校・女子部〈理数コース〉では国・英か算・英のどちらかを選択する形で「英語選択」入試を導入。英語経験者への門戸を広げる。

中学入試に「英語を導入」する動きは、現在の小学校５年生が挑む再来年2016年入試や、それ以降の中学入試に向けても、他に与える影響は少なくないだろう。

●横浜英和女学院が青山学院大学と教育提携

横浜英和女学院（横浜市。女子校）は、現在の小学校５年生が入学する2016年４月から青山学院大学の系属校となり、校名を「青山学院横浜英和中学高等学校（仮称）」と変更。この提携を期に、2018年度の中学１年生（現在の小学校３年生）の入学時から共学化に踏み切ることも公表した。

中学受験生と保護者にとっては気になる「青山学院大学への推薦進学」については、あくまで現時点での見通しとして、2016年以降の入学者については、一定の条件を満たせば希望者全員が青山学院大学に推薦で進学でき、それ以外の大学への受験～進学の道も開けている形になる。来春2015年入試に挑む現小学校６年生も、これとほぼ同じ扱いになるだろうと公表している。

来春2015年入試で人気を高めている立教女学院。近い将来には「IBプログラム」の導入も検討しているという。

前回の『ブレイク』9月号「私学の魂」浅野中学･高等学校の記事文中に一部誤植がありました。
P24右段5行目に「排出」とありますが、正しくは「輩出」です。お詫びして訂正させていただきます。